北京日本学研究中心

日本学研究

二十一

學苑出版社

北京日本学研究中心

日本学研究

二十一

學苑出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本学研究.第21辑/北京日本学研究中心编. --北京:学苑出版社,2011.11

ISBN 978-7-5077-3900-8

Ⅰ.①日… Ⅱ.①北… Ⅲ.①日本—研究—丛刊 Ⅳ.①K313.07-55

中国版本图书馆CIP数据核字(2011)第237407号

责任编辑:韩继忠
出版发行:学苑出版社
社　　址:北京市丰台区南方庄2号院1号楼
邮政编码:100079
网　　址:www.book001.com
电子信箱:xueyuan@public.bta.net.cn
销售电话:010-67675512、67678944、67601101(邮购)
经　　销:新华书店
印 刷 厂:永恒印刷有限公司
开本尺寸:787×1092　1/16
印　　张:30
字　　数:600千字
版　　次:2011年11月第1版
印　　次:2011年11月第1次印刷
定　　价:100.00元

主　　编　徐一平　笠原清志

编　　委　曹大峰　施建军　张龙妹　潘　蕾

　　周维宏　葛东升

执行主编　施建军

前　言

《日本学研究》自20世纪90年代创刊以来，一直是我国日本研究领域学者发表学术论文的重要园地，得到了海内外同仁们的广泛关注和支持。为了建设好这个学术园地，维护好她的学术声誉，我们一直秉持着“学术至上”的理念，恪守匿名评审原则，严格遴选每一篇论文。原创性是论文的生命，我们在组稿时十分注重论文的原创性。不论是名不见经传的年轻学子还是蜚声海内外的老一辈学者，我们都十分欢迎他们惠赐高质量原创性论文。

2010年恰逢北京日本学研究中心创办25周年，中国的日本学研究迈入21世纪也已10个年头。为了纪念日本学研究中心成立25周年，总结新世纪头十年中国日本学研究的成果，探讨未来世界日本学研究的新动向，我们举办了“世界日本学研究的趋势与合作”大型国际学术研讨会。在这浓厚的学术氛围中，《日本学研究》21期开始组稿。这一背景为本期的编辑出版创造了绝好的条件。我们在本期中收录了这次研讨会的重要成果，如我国和日本著名学者严绍璗、青木保的基调报告全文，以及来自中国、美国、法国、日本、韩国等国家的知名学者有关“世界日本学研究的合作以及向下一代学者的传承”的对谈。这些学者们的真知灼见不但充实了《日本学研究》21期的内容，而且给读者们为自己今后的日本学研究提供了科学的参考。

本期《日本学研究》所发表论文的绝大部分仍然是广大日本研究学者们的投稿。我们从大量的投稿中经严格的匿名评审遴选了26篇高质量的稿件予以发表，占本期发表论文数的76%。这些投稿绝大多数来自年轻学者，有相当一部分是在读博士研究生的成果。这些高质量独创性成果折射出了一个事实，就是中国年轻一代的日本学研究学者正在茁壮成长。他们正处于思维的旺盛时期，他们的创新是中国日本学研究未来的希望。《日本学研究》也将永远为年轻学者的创新提供舞台。

《日本学研究》在国内外广大日本学研究学者的关爱下走过了20年，在此我们向关爱支持《日本学研究》的学苑出版社及广大同仁们表示感谢！同时向长期资助《日本学研究》出版的日本国际交流基金会表示感谢！

北京日本学研究中心

《日本学研究》21期编委会

2011年7月18日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　录

“世界日本学研究的趋势与合作”国际学术研讨会专栏

基调演讲

21 世紀グローバル化の中の日本研究
——東アジア現代文化圈の形成に向かって …… 青木　保/1

我对“日本学”研究的思考 …… 严　绍璗/13

大会论坛

世界における日本学研究の連携と次世代への継承 …… /19

日语语言学

「なる」と「する」の体系：自動詞・他動詞の文化論的省察…… 井上亘/50

汉日通用语料库分析工具研制中的关键技术问题及其解决 …… 施建军/61

论有对自动词使役态的成立问题
——当被使役者为“非情物”时 …… 王　欣/71

「とき節」構文の表す時間的な意味 …… 刘艳文/82

語りの「モノダ」についての一考察 …… 洪　洁/99

空間名詞トコロの意味拡張
——トコロヲを中心に …… 陳燕青/110

日本近代速記資料における程度表現をめぐって
——その使用分布と文法的特徴に焦点を当てて …… 趙　宏/123

日语“人间”一词的意义及其翻译…… 向　卿/136

日语词语搭配的研究内容及其研究方法
——以动词搭配为例 …… 王华伟　曹亚辉　郭燕燕/147

日本语教育

学生の相互評価が発表意識及び発表効果に及ぼす影響
——日本語専攻出身の大学院生を対象に …… 朱桂荣/159
中国の日本語専攻教育における「敬語教育」に関する考察
——学習者へのインタビューと教科書分析を中心に …… 任麗潔/171
言語運用能力の向上を目指した教室活動の改善
——大学における第2外国語としての日本語(初級)の場合 …… 侯麗頴/188

日本文学

有吉佐和子眼中的人民公社
——浅析《有吉佐和子的中国报告》 …… 杨珍珍/200
论川端康成文学的救赎性格…… 肖　霞/208
城山三郎『素直な戦士たち』における宗教的境地…… 德永光展/219
动画片《悬崖上的金鱼姬》的互文性
——在东西方文化史中的解读 …… 秦　刚/231
『伽婢子』における時間設定の意味…… 卢俊伟/242
平安朝文学中的“蛛丝”…… 梁　青/252

日本文化

思想問題としての「日本学」…… 張彦麗/263
1945年以前日本的《老子》研究 …… 郭永恩/270
老方対若方
——『吾妻鏡』建暦二年十一月八日条を繞りて …… アダム・ベドゥナルチク/278
古代日本天皇家の乳母の系譜…… 潘　蕾/285
中国の天狗と日本の天狗…… 王　鑫/300
日本电影中的大众演剧要素…… 吴咏梅/314

日本社会

循環型社会づくりに向けた日本のごみ有料化についての研究…… 王　猛/330
关于日语专业学生就业意识的实证研究
——影响学生选择日企的因素初探 …… 张　弢　窦心浩/344

2011年度优秀硕士毕业论文

アンカー漸進法に基づく中日文アライメントに関する研究…… 吴晓一/352
総合日本語教科書における会話文への一考察
——「場面」の視点から …… 陶烏雲/376
『祖国喪失』と堀田善衛の〈上海・1945〉
——「国際都市」における「裏切り者」の逃亡と越境 …… 陳童君/404
对中世初期地藏信仰的考察
——以《今昔物语集》的地藏灵验谭为中心 …… 齐梦菲/420
退職前後の夫婦関係満足感に関する研究
——夫婦の家事参加と情緒的サポートを中心に …… 康艶梅/436

『日本学研究』投稿規定…… /461
『日本学研究』執筆要領…… /462
《日本学研究》征稿启事…… /464
《日本学研究》撰稿规范…… /465
後　記…… /467
Contents …… /468

21世紀グローバル化の中の日本研究
——東アジア現代文化圏の形成に向かって

青木　保

本日は、北京日本学研究セーター設立25周年という大変おめでたい日にお招きをいただきまして、誠に光栄且つ嬉しく存じております。陳雨露北京外国語大学学長先生をはじめ、とくに北京日本学研究センター所長の徐一平先生、誠に一研究者としてもまた一人の日本人としても、この25周年を迎えた素晴らしい研究センターの成長を心から嬉しくまた幸せに感じます。もちろん、また大学、ならびセンターの関係者の皆様にもこころから感謝を申し上げたいと思います。私はこの以前、十年ぐらいの前だったと思いますが、この北京日本学研究センターの新しい研究棟ができたときの開所式がありまして、そこの記念式典においても、お話をさせていただいた記憶がございます。それが今日のような形で発展し、また、今日は全く予想しなかったことでございますけれども、名誉教授の称号までいただきました。心から感謝をあらためて申し上げたいと思います。

そこで、日本研究についてですけれども、21世紀に入りましてから、この日本と中国、それから韓国及び東南アジア諸国も含めた東アジアに向ける国際環境、特に国際文化環境ですね、これは非常に変わっておりまして、20世紀には見られなかったようなさまざまな光景が見られるようになっております。もちろん、この中国をはじめ、韓国、あるいはシンガポールといった国々の目覚しい経済発展、それはもう今さら指摘するまでもございませんが、と同時に中国をはじめ、東アジアの諸国が21世紀に入ってから、特に学術・文化・芸術に対する様々な政策を行うようになりまして、積極的にその学術・文化・芸術の振興を図ろうとしております。ですから、大学院もあるいはさまざまな文化活動へもこの中国をはじめとする国々の政府や、あるいは民間、あるいは社会が大きな支援をするようになりまして、いまやこの東アジアっていうのは、一大学術文化圏だとして世界から注目されるようにもなっております。まあ、この地域はですね、実は、ご存知のように、経済的には交流が非常に活発でありますが、政治体制もそれぞれ違いますし、また言語や文化や、もちろんその民族、様々な面で、まさにユネスコが言っております文化の多様性の代表例のような地域でありまして、細かく見れば、もう茫然とするような様々な言語や、民族や、あるいは文化がございます。こういうことで、今非常に活発になってきたことはその文化交流でございまして、ただ日本で、もう今や中国語や韓国語のテレビとか、映画とか、あるいは音楽、絵画、そのほか、もちろん中華料理はずっと昔から日本に入ってきておりますが、韓国料理も含めて、またさまざまなアジアの料理が日

本人の好むこととなりましたし、また古典芸術といった面で交流がなされております。この20世紀には、ほとんど見られなかったことでございます。中国の映画、あるいは中国の音楽、あるいは中国の現代的な、たとえば俳優ですね、女優さん、章子怡とか、そういう人がテレビにいつも出るようになりましたのはまさに21世紀に入ってからのことでございまして、こういう状況はまあ20世紀には全くみられなかった。だから21世紀って非常に大きな意味でこの地域に変化を与えるし、それがまたこの世界にも大きな変化を与えているというふうに思います。

言うまでもなく、東アジア地域は世界最大の経済発展地域でありますけれども、同時にまあ先ほど申しましたような様々な違いというものも逆にグローバル化が進みますと意識されます。これまであまり気がつかなかった異文化の違いとか、あるいは言語の違いとか、あるいは文化・習俗とか、習慣とか、また地域の違いとか、こういうものもグローバル化の中で浮き上がってきますと、そこに相互交流も行われていますけれども、いろんな誤解とか、あるいは不信とか、そういう対立や紛争を招くような要因も出てまいります。こういう要因ですね、実はこの東アジアにおいて、北京において、こういう日本学研究、あるいは地域研究っていうものは非常に盛んになって、こういう研究所、研究センターができたということはたいへん21世紀の東アジアにおける平和と安定のためには、あるいは発展のためには大変重要なことだというふうに思います。

実は2007年の9月に中国の南通市で「日中韓文化大臣フォーラム」というものが中国政府の提唱によって行われました。これは、この三国はですね、互いの文化を尊重しながら、積極的な文化交流をすすめようということを目的とした会議でございまして、「南通宣言」というものが公に発表されております。これは非常に地味なものでございますから、あまり取り上げられないですけれども、ちゃんと南通市郊外の植物園、中国の最大の植物園と聞いておりますが、そこに大きな石碑を建てておりまして、中国と韓国と日本の(私は長官でしたけれども)文化大臣がサインをして、中国語・韓国語・日本語の宣言文がちゃんと彫られておりますので、これは生涯というか、永遠に残るものだと思います。こういうことが行われたということも皆さんに広く知っていただきたいと思います。そういう文で、対等な立場でこの三国間の文化交流をすすめるということが公に宣言された、歴史的にはかつてなかったような出来事が起こっております。その後、この「文化大臣フォーラム」は2008年12月に韓国の済州島で行われ、また同じように積極的な文化交流を歌う石碑を建てております。まあ、今年、あるいは来年は日本で第三回目が開かれる予定となっておりますが。こういうことが地味ではありますけれども、政府はやっぱりとり組んでですね、文化交流をしようというふうに、条約ではないですけれども、宣言文を公に発表するということはこの東アジアにおいて大変重要でありますし、また日本・中国・韓国の関係というものを考えた場合に画期的な出来事であるというふうに思うわけでございます。まあ、そういうところから、東アジア文化圏と申しますと、そのときの会議でも、話題になりましたけれども、これは従来、もちろん中国の

古代文明に発する儒教文化圏、あるいは漢字文化圏が、これは東アジアの文化圏という同じ意味をもっておりましたし、日本も、韓国も、あるいはベトナムもまたそのほかが大きな影響を受けてきたことは事実でございますが。この宣言文はですね、そういうことをちゃんと踏まえた上で、現代の様々な文化交流をしようと、文化圏を作ろうと、そういう意味で、私は現代東アジア文化圏というものがいよいよできつつあるというふうに思います。まあ、テレビドラマなんかの共同制作や、日本の俳優が上海で映画を撮ったり、中国の映画に出たりですね、韓国と合作したり、大きな共同制作、日・中・韓の共同制作による大きな映画ができて、まあ『レッドクリフ』というようなものができたり、そういうことはいっぱい起こっているわけですね、現実には、こういう点で、私はそういうことを注目しつつ、そのなかに日本研究、あるいは中国研究、韓国研究、そのほかの東アジアの地域研究というものを今後おさめつつ、発展させることが重要ではないかとあらためてここで申しあげたいと思います。まあ、地域研究というのはですね、中国語で「地域研究」といっては、どういうことがイメージとしてわかりませんけれども、基本的には、例えば、第二次世界大戦中にアメリカで戦争してみました相手の日本を研究する、まあ日本研究、戦略的な日本研究っていうものが大々的に行われまして、その結果、その戦略研究とは違った研究でありますけれども、実際にはそういう敵国——日本の研究ではなくて、大きな意味での日本文化の研究、あるいはそれが世界のなかに位置づけられる研究が、例えば『菊と刀』というものが生まれておりますが。その後の第二次世界大戦後の冷戦時代の中で、とくにアメリカを中心として戦略的な地域研究というものができました。コーネル大学の東南アジア研究プロジェクトとかですね、シカゴ大学の東アジア研究プロジェクトとか、有名なものがございますが、これは政府がいっぱいお金を出して、そういうことをやった。それから、ベトナム戦争の時には東南アジアプロジェクトが非常に大きな役割を果たしましたけれども、ただそういう戦略的な研究の中でですね、例えば、戦中に日本を敵国としてですね、戦争している敵国として、それを、まあなんとか理解して、それを攻略しなくちゃいけないといった意図のもとに作られたような日本研究、地域研究としてのプロジェクトから、世界を代表する日本学者というものが生まれてまいりました。例えば、日本の文部科学省が文化勲章を授与して祝福いたしましたドナルド・キーン先生、コロンビア大学とかですね。それをはじめ、たくさんの世界の研究者がいらっしゃいますが、ある点では戦略的な地域研究という目的で集められて研究をしたんですが、その結果、日本文化、あるいは日本語、あるいは日本文学というものに対する非常に大きな関心を抱いて、それでもういわゆる学問的な純粋な日本研究というものに邁進されて、日本の専門家も賞賛するような日本研究が生まれたということがございます。そうしたら、地域研究っていうものは、これは非常に政治的なものだと言って否定する人もいるんですが、実は今の東アジアのタイミングを見てみますと、やはり地域研究っていうものをお互いの国が称揚することによって、あるいは非常に重視することによって、実はある意味では危うい関係もありますような日本・中国、あるい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は日中韓三国といったところでの関係の将来というものが、お互いに非常に明るい兆しをもたらすのではないかと思います。そういうことを申し上げたうえで、あくまでも地域研究っていうものは、いまここで申し上げたような日本研究も含めて東アジアの平和と安定、それから発展を目的として行うということがはっきりと前提とされることが重要であります。

で、以下、わたしはこれまで見てまいりました地域研究、まあ日本研究の現状を見て、いくつかの提案を申しあげたいと思っております。まず第一にですね、国際的な日本研究の分野、研究分野っていうものを考えますと、まず第一には個人の専門的な研究っていうものがございます。つまり、個人で研究者として、例えば大学に入って、なんか日本に対して興味を持って、それで日本語を勉強して、日本のことをやり始めて、専門として追究する、そういう大学の研究者の一つの典型でございますが、これはもちろん日本語の研究、あるいは日本語の教育といったものがまず第一にあります。それから、日本語といっても、現代日本語もありますし、古典語もありますし、もちろん古文とか様々なものがございますが、日本語の研究そういうものがあります。それから、古典とかですね、先史考古学とか、歴史とかですね、文化・芸術・文学などの研究が個人的な研究として、これも好きでやる、基本的には研究者が自分の関心で行う研究ですね。ここにいらっしゃる中国をはじめ、韓国、それからもちろん欧米からいらっしゃった研究者、みんなその面で世界的な業績を行われる方でございまして、美術から音楽からあらゆる面にわたっての専門家で、これは日本研究でありますが、どうしても学問研究として、いわば世界第一流という評価を多く受けられている方ばかりでございます。

それから、二番目としてですね、社会科学的な研究っていうことでございます。これは問題とか課題というものを時代の状況に応じて追究するものでありまして、政治とか、経済とか、あるいは社会の問題とか、あるいは国際関係などの問題であって、先ほど言いましたアメリカにおける地域研究は大体東西冷戦の始まりました40年代の終わり、50年代から出てくるわけですけれども、これはどちらかというと、こういう70、80年代においては、アメリカでは日本研究とは特に経済の仕組み、それと政治の構造とか、あるいは社会のあり方とかというものを追究するものが多いです。日本はどうして経済成長をしているのか、発展しているのかということに対しても、とくに日本に対する専門家ではなくても、あらゆる分野の人は関心をもった時代がございました。そういう社会学的研究の場合は、とくに日本語について、もちろん日本語が大変上手な方もいらっしゃいますけれども、とくに日本語に精通しているということではなくて、社会学的な、いろいろな方法論で、経済学とか、あるいは政治学の方法から追究していくものであります。

三番目は比較論的研究であります。これは日本を見る場合に、中国との関係とか、いろいろな事例、例えば日本の神話と中国の神話を比べるとかですね、あるいはもちろん経済とか政治のものもありますけれども、日本の伝統的な芸能と中国の伝統的な芸能が比べられるような比較的研究、あるいはいろいろな形で行われていま

して、日本では日本と西洋、日本と中国との関係を比較的に見るという研究も出ているわけであります。

四番目は地域研究として、私は特に重要であると思いますのは全体論的な研究、ホリスティックな研究でありまして、これはとかくですね、中国とは何か、中国文化とは何か、中国人とは何か、それに対して、日本人とは何か、日本とは何か、あるいは日本文化とは何かという大きな問題を立てて、いわばそれを考察するという、それでは最初に始まったのはルース・ベネディクトの、中国語の訳も三種類も出てきたと聞いておりますけれども、『菊と刀』という本ですが、あれが戦時中の対日本の戦略的な研究のなかで生まれましたけれども、戦後の1948年ですかね、1948年に出版されますと、たちまちアメリカのベストセラーになりましたが、日本でも翻訳が出ると、ベストセラーになりました。これは全体的に、日本とは何か、日本の社会、日本の文化や日本人の考え方とは何かということをベネディクトさんが文化人類学の手法を使って分析したものでございまして、現在でも日本でも新訳が出ているし、またアメリカのどの本屋にもペーパーバックとして売られているというものであります。ただ、これは先ほど、個人的な専門家の間では非常に評判が悪いですね。つまり、日本文学の専門家、歴史の専門家、あるいは伝統的な文化の専門家からは、まあいろいろなそういう専門家から見ますと、日本の国内でも国外でもこれがもう大雑把すぎるとかですね、いわば非常に推論が多いとかですね、というような形で、それを専門家が相手にしないっていうことが、一般的な傾向として見られますが、日本人そのものはあれを読んでやっぱり日本とは何かということをあらためて知らされたということになりました。当時東大社会科学研究所の教授、法哲学者の川島先生、川島武宜教授が書評を書いて、こういう研究は実は批判するのはいいんけれども、実は大変重要だと、こういう全体論的な研究、ホリスティック的なアプローチはまさにこれまでの日本における日本研究が欠けていたものであると、だがこれは絶対に重要だという書評をされたのは記憶に残っています。ただ、国際的な日本学研究においてはどうしても外国人の目、あるいは違った文化を持った人たちの目でいかに専門的にやっても、日本全体、「日本とはなにか」という視野がどこに入っているんです。日本人の中でやっていると分からないんですけどね、日本は空気みたいに日本のことを考えていますから、分かりません。ですけれども、外からみますと、やはりに日本がこう違うとか、中国と比べても、アメリカと比べても、こういう違うことが出てきます。これはある程度では印象であり、推論でもあるんですが、その印象とか推論っていうのは非常に重要であって、そこから日本人とは何かということをつかまえると、これはまあ非常に重要だから、やっぱり国際的な日本学研究の場合に、それをどこかに頭において、どんな専門的な研究であっても、進めていただきたいというふうに思います。

次の問題としましては、いわば異文化理解とか、相互理解のための日本研究でありまして、これは戦後もベネディクトは日本に来ませんでしたけれども、ハーバート・パッシンさんとかですね、いろいろな人が、アメリカの人類学者、あるいはヨー

ロッパの人類学者が日本にいらっしゃって、日本の社会で住んで、しかも一年も二年も、例えば三重県の漁村に住んで研究されたとか、非常にインテンシブで、その地域の文化、社会、あるいは経済や、職業の構造などの分野を調べて、詳しい地域研究というものが現れてきまして、これは社会関係とか、人間関係とか、あるいは民俗、民俗とはフォークロアのことですね、あるいは風俗とか、習慣とか、日本人の事物の捉え方とか、あるいは日常生活で何をやっている、何を食べているとか、親子関係とか、あるいは食材や食文化や、日本といってもいろいろな地域によっても違うとか、そういう日本人の研究、地域の集団の特色や組織のありかたといったものはフィールドワークを中心にやっていく研究で、それは今でも様々な形で行われております。

三番目としては、ちょっと新しい現象としてはですね、グローバル化する日本文化の研究っていうのは、最近はやってきまして、これは2002年にアメリカのジャーナリストのダグラス・マッグレイという人がクール・ジャパンとジャパン・クールという論文を発表しまして、これは現代日本文化の、これは日本に半年ぐらい滞在されて日本の渋谷の文化から、もちろんアニメ、マンガ、コスプレとか、ファッションとか、食生活、あらゆる、車のデザインとか、そういうものを全部よく調べた上で、これは非常に世界のなかでも日本の現代文化が一番格好いいぞと、COOLという言葉が、クール・ジャパンということを指摘されたんですね。この論文は非常に評判になりまして、例えば、フランスのパリではジャパンエクスポートというのが生まれて、これはパリからいらっしゃる方がご存知ですけれども、今年などは五日間ぐらいで15万人ぐらいの、16万人だったかな、フランス人の関係、これは日本のまさにCool japanのデモンスレーションですね。これはパリの、フランスの3人の男女が始めたころですけれども、最初はやってもらってなかった。ここ数年ものすごい人気になって、現代日本の文化に対する関心というもの、中国でもコスプレ大会とかありますからね、いろいろなものがありますが、このCool japan研究というのは、最近の一つのあらわれです。最近ではアメリカの人類学者で、アン・アリソンさんという人が『ミレニアム・モンスター』という本を書いて、これは日本では『菊と刀』に結びつけて、『菊とポケモン』というもので、最近翻訳は出ましたけれども、これはポケモンとか、日本のおもちゃ、ポケモンに対応される玩具とか、アニメとは、そういうキャラクターグッズがいかにアメリカに浸透していったかという研究なんですが、そこで主張されているのは、面白いことは、最初はアメリカでポケモンのアニメを上演するときに、俳優とか製作者とかはですね、日本のポケモンの漫画とアニメを上演する場合に、日本的なものを消そうとする、日本の、日本人の特有の表現をなるべくアメリカで分かる形に変えて、上演していたというか、そのうちに、だんだんインターネット、そのほかで、ポケモンに対する考え方が、だんだん子供をはじめ、みんな知るようになりまして、一時そういうことをする必要がなくなって、日本で作られたけれども、アメリカ人もまったくどこで作られたかというよりも、その自体が面白いから、それ自体がいいから、というので広まってきたという

ことをその本で言っていらっしゃいます。

それは後も述べますけれども、まさにクールジャパンの一つの大きな特徴でありまして、あまりこう日本がというような形での主張というものは、現在の日本のクール文化、日本のクール・ジャパンの現代文化には一部ありますけれども、現れておりません。例えば、村上春樹さんの小説については、中国語の翻訳も、もちろん韓国語の翻訳も、いろいろ世界中の言語で翻訳されていて、アラビア語、ヘブライ語、もちろんヨーロッパの言語もほとんどやってもらっていますし、もちろんタイ語とか、インドネシア語とか、トルコ語なんかも出ていますけれども、どこでもほとんどベストセラーになっております。こういう村上さんの文学はですね、現代日本を描いた文学、確実に日本語で書いたものでありますけれども、描かれた作品ってはどこの人が読んでもこれが面白いと、特に若者青年層がそれを読んで、非常に面白いと。私は以前ドイツで客員教授をしていた時に、そのドイツの大学の若い女子学生が村上さんの本を持っていますから、ぱっと見たら、「村上春樹」と書いてあるから、「このドイツ語の村上春樹の本、面白いの」、「日本人の作家って知っていますか。」と聞いたら、「もちろん知っていますよ。だけど、ここに書いてある問題というか、小説のストーリーとか、主人公はまさにドイツの我々と同じ悩みとか、苦しみとか、愛とか、セックスとか、そういうものを持っている」。だから、特に日本人っていうことは、日本の作家が書いた日本の物語ということは、意識しないで、鑑賞しています、愛読していますと言われましたが、ドイツの地方都市で、大きなショッピングモールがあって、そこに大きな本屋があるんですけれども、その入ったところにですね、村上さんの本がこんなにたくさん並べたんですね、他の本ではそうではないです。ほかの本はもっと奥のほうで、一番下の取り易いところに、村上春樹のドイツ訳が置いた。これはイタリアでもそうだし、ニューヨークへ行ってもそうだし、いろいろなところで、そういう現象が起こっていて、私は、これは語弊になるかもしれませんが、現存する世代の作家で、一番意欲の世界で、読まれている人、まあもちろん古典的にはトルストイ、ドストエフスキー、ヘミングウェイとか色々といますけれども、現存する作家の中で、世界で一番広く読まれて、世界で一番多くの言語で訳されているのは村上春樹だと思う。それしかいないと思いますね。だから、アラビア語圏、ヘブライ語圏でも必ずしもピンチョンとかジョンアーデンとかというアメリカの作家も訳されているわけでありますし、日本においても、大江健三郎とか、川端康成とかのノーベル賞作家はおりますが、これは文学が好きか、日本に関心を持っているか、そういうような専門家の間の関心に答えるものでありますが、村上春樹さんだけはもう一般人に非常に広く読まれているわけです。こういう現象っていうのはどうしておこったのかと、私は非常に興味がありますが、このこと、こういう問題は、みなさん国際日本学においては、文学の専門家などが村上さんの文学を研究して、いわば文学的な研究、それを分析するという、それは重要ですけれども、同時にこういう作家はどうして戦後の日本から出てきたのかということをもっと追究していただきたいと。それは私の自分の課題でもございます。

それから、もう一つはですね、これは村木さんといって、春樹さんのような作家じゃなくて、現代のアーティスト、美術家の村上隆という方がいますが、これもアニメとかキャラクター・グッズを使って、ニューヨークのクリスティーズのオークションで日本の美術として最高の高値で取引されるような作品です。これは何と言うと、こんなキャラクターグッズですよ、ポケモンみたいなもん、これをやっているわけです。それから、今、パリでは、パリの郊外のベルサイユの宮殿で、村上隆さんの展示会が行われておりますが、これも反対もあるみたいですけれども、ベルサイユの宮殿にはルイ王朝の壮大なる古典的な様式の建物の中に、美術があるなかに、まあ、現代的なキャラクター・グッズ、日本からきましたキャラクター・グッズが展示されてありますね。「このコントラストはさすがフランスの人は芸術的なセンスがすごいなあ」と、私はその言葉を『ニューヨーク・タイム』で読んで、感心したんですけれども。そういうことは実は行っているんです。サン・パウロ市の美術館の館長さんは「私が世界で一番関心を持っている現存の画家というものは、村上隆さんと、なんとか個展ができないか」というような相談を受けましたけれどもね、そんなことがあって、日本国外でもはるかに評価を受けているような状況でもあります。

こういうクール・ジャパン的なものの背景、それから、その表現といったもの、まあ日本の現代文化っていうものを考える場合に、あるいは日本研究を考える場合に、日本文化の世界の一つの特色って言いますかね。いわば日本が明治時代、あるいはもっとその以前から、日本というのは様々な外国文化の、あるいは海外文化の影響を受けて自分の文化を作ってきた国でありまして、もちろん、古くは、儒教とか、漢字とか、これは中国の古代文明からの影響はとっくに受けていますね、京都のような都市計画、律令体制のような政治体制、もちろんインドからの中国を経てきた仏教も日本の宗教となりました。それから、同時に、日本固有の、古来からある神道とか、神道に裏づけされた天皇制というのは現在でもちゃんと残っています。まさに、天皇陛下が日本を代表する君主でございますから、それは残っている、神道的なもの、天皇制みたいの形でも残っていますし、さまざまな日本の文化の基礎にそれがあって、そのうえに、アジア大陸からの中国文明とインド文明の影響を強く受けていますが、近代になってから、明治期以降はですね、とくに西洋の近代文化の影響を受けています。少なくとも、この三つの文化の影響を受けていますね。これはまあ日本人っていうのは、盛んに取り入れながら、例えば、普通は仏教のような高級な大宗教が日本に入ってきますと、神道のような、日本人のやっている信仰、こういうものは大体その下に置かれるか、消えてしまうことが多いですね。これは東南アジアなんかでも、イスラムとか、仏教、あるいはキリスト教が来ると、そこの土地の宗教っていうのは軽く見られて、下になっちゃう。日本の場合だけはですね、神道として、今現在でも皆さん東京へ行かれても、神社いっぱいあるわけであります。仏教寺院もいっぱいであります。両方が「神仏混合」とか「融合」とか言われながら、並存して、つまり日本神道の神様と仏教の仏様が一緒になってですね、僕でも育った時代の世代には、ちゃんと自分の家には神棚という神道の神棚と、それから仏壇

といって、仏教の祭壇がありました。まあ、今でもそれはずっと続いている習慣で、まあ最近のマンションのなかにはない場合もありますが、基本的な信仰というのは両方ということですね。それから、近代西方がきて、キリスト教が入ってきたけれども、日本人は西洋的な生活様式、あるいは西洋的なものの考え方、議会制とか民主主義とか、いろんな政治思想も取り入れて、現在の日本文化を形成しているんですが、形成しているのは三つの大きく分けて、日本土着の神教的な日本を代表される日本文化と、それから大陸からきたインド古代文明、中国古代文明の影響、それと近代西方の影響、三つをですね、巧みにお互いに対立させないで、それで現代日本文化として、今存在させております。これは私も東南アジアや、アジア各国、トルコまで、ヨーロッパでもいろいろなところで見ているんですけれども、こういうふうに、あんまりこう……宗教ってどっちにしても、強さを抑えたりですね。あるいは異端だといって、鎮めたり、いろいろな対立がありますね。日本の場合は、そういう対立はほとんどありません。なんとなく日本人はそれらを取り入れて、外観的にはまったく、いわばアメリカ的、西洋的なスタイルを持ちながら、神道もあるというそういう生活をやっておりますし、まあ、日本人の食生活といえば、朝にコーヒーとサンドイッチにセットされたフランスタイプ、昼は中華とか、夜は中華、あるいはフランス料理、イタリア料理という、そういうことを平気でやっているのですね。こういうのはどこへ行ってもないんです。中国ではですね、もちろんマクドナルドもありますけれども、基本的は中国料理、タイに行ってもタイ料理が中心で、こういったいろいろな要素を全部取り入れながら、勝手に食べているようなそういう国民というのは世界では私が見たことがありませんね。まあ、好きでときどき日本料理を食べるとか、好きでときどきイタリア料理を食べるという人はいろんなところにおりますけれども。

こういうのは私は「混成文化」と呼んでまして、「混成」というのは『老子』の言葉から取った言葉で、いろいろな違った秩序ってものが中国古代で混じりあって、一つの文明を作り出したというときに、「混成」という言葉を、『老子』の一番最初に出てきます。ただ問題はですね、日本の場合はうまく行っていますが、他のアジアの諸国では、やはり西洋的な近代文化に対する反発、あるいは先ほど言ったように、いろいろなアジア諸国に対しても、それをうまく自分の中で消化できない場合があります。逆に、もちろん、いろいろな歴史的な体験、殖民的な体験とかもありますけれども、現代においてもなかなか今言ったように、自分たちの土地で生まれたような文化とそれからアジアの大文明とですね、それから近代的な、あるいはアメリカ的な、近代西洋的な、あるいはアメリカ的な文化っていうものをうまく混成しながら、文化を作り出してというところはなかなか見当たりません。どこか必ず対立とか、摩擦とか、そういうものが国内で、そういうものを取り入れますと、起こっております。中国も大文明を持っていますが、もともといろいろな地域に行けば、土地のいろいろな固有の宗教もあれば、文化もありますが、それはまあ漢文明と言いますね。中国文明というものが混成されておりますが、僕たちと同じように、近代において

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com